

～ 利益を得る繁殖管理① ～

先日東京に出張させていただき繁殖のセミナーを聞いてきましたので今回はその報告です。

◆ 収益性に対する繁殖の影響

初めに……

酪農家は繁殖で稼ぐのではない

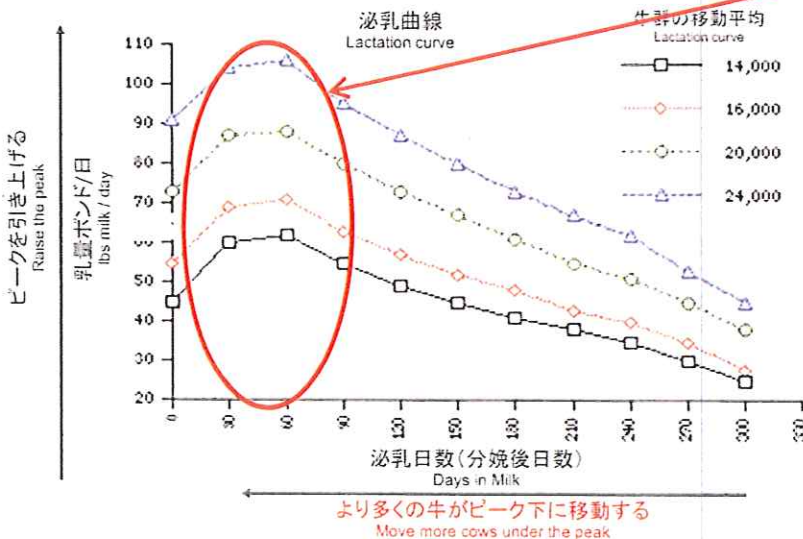
繁殖は目標達成に不可欠な手段に過ぎない

実際に繁殖からの収入を生み出すのは分娩後のミルクと子牛であり、これらはともにかなり遠い将来（280日後）にやってきます。繁殖障害は廃用牛出荷として短期的な収入を生み出すこともありますが、牛を更新するためのコストが増加してしまいます。

《实际的に酪農の収益性を上げるための2本柱》

- ① ピーク乳量を上げる
- ② 泌乳ピークに近い牛を多く維持する

ここに属する乳牛を増やす



泌乳曲線：

分娩後日数に伴う産乳量の推移を示した曲線。個体単位ではなく、群単位の牛の状態把握に役立つグラフ。

1つ目の「ピーク乳量を増やす」ためには餌や牛舎環境などの飼養管理や遺伝的性質を改善させなければなりません。一方で2つ目の「泌乳ピークの牛を増やす」には泌乳末期の空胎牛を淘汰し、また、可能な限り早く種付けをして回転率を高めることで達成されます。

この泌乳曲線は平均すると経産牛では乳量が1日約75gずつ、初産牛では約50gずつ減少していくとされ、290日間泌乳することが最も利益が高いとされています。牛の妊娠期間（280日）、乾乳期（45~60日）、分娩後の子宮の回復（20~40日）を考慮すると、これは事実上「可能な限り早く種付けをする」と言い換えることができます。

上図の泌乳曲線にどのようにインパクトを与えるかで収益が左右されるわけで、繁殖を改善させることで2つ目の「泌乳ピーク牛を増やす」ことが可能となり、収益性向上につながるわけです。

そして、繁殖が改善しているのかどうかを最も的確に表している数字が空胎日数や分娩間隔ではなく、これまでも何度か登場してきた「妊娠率」なのです。（次回）